

3 在世の本門、滅後の本門

さて、いままで述べてきましたのは法華經の中国の古来の伝統的な迹門、本門という分け方に即した法華經独自の二大思想ですが、もう一つの分類のしかたによってあらわれてくる思想があります。

もう一つのわけ方というのは、仏様が法をお説きになった場所についての分類で、法華經は二処三会にわたって説かれています。二処三会とは二つの場所で三場面のドラマが展開するという意味です。

1 前靈山会

靈鷲山上において釈尊が説かれた序品（第一章）から法師品第十までの十品（十章）

2 虚空会

釈尊が虚空に上がって法をお説きになった見宝塔品第十一から囑累品第二十二までの十二品

3 後靈山会

再び釈尊が靈鷲山上に降りてこられて法を説かれた薬王菩薩本事品第二十三から經末の普賢菩薩勸発品第二十八までの六品

この前靈山会、虚空会、後靈山会の二処三会の中心は、虚空会にあり御祖師様が「其後又法華經の中にも迹門はせすぎて、宝塔品より事をこりて寿量品に説き顯し、神力品属累に事極て候しが・・・」

（新尼御前御返事 昭定866頁）

と言われているように大変、重要視をされた部分で、法華經の法華經である特徴は虚空で釈尊が法をお説きになるところです。

法華經の部分、部分が時間をかけて成立して、後にそれが一体となって編集され結合したものとする現代の仏教の研究者達によれば、法華經の成立の上からいっても、ちょうどこの三つの分類のとおりに分けることができると主張をしています。そして、

それぞれが成立年代が違ふといいますが、いちばん古いのが前靈山会の部分、次が虚空会、そして、後靈山会の部分は後から付加されたのであるといっている人が多いのです。

これらの説はともかく、伝統的な迹門、本門の分類と、この二処三会の分類とオーバーラップさせると大事な虚空会のうちで見宝塔品第十一から安樂行品第十四までの分は迹門に属し、従地涌出品第十五から囑累品第二十二までの分は本門に属します。

本門の従地涌出品から囑累品第二十二までの品をあげてみますと、

従地涌出品第十五
如来寿量品第十六
分別功德品第十七
随喜功德品第十八
法師功德品第十九
不輕菩薩品第二十
如来神力品第二十一
囑累品第二十二

となり、これらを本門八品と申します。私たちが、御看經の時に本門八品所顯、上行所伝、本因下種の南無妙法蓮華經という、その本門八品のことです。

虚空会のうち、本門に属する本門八品は最も重要なところで御祖師様は觀心本尊抄の中に

「是の如きの本尊は在世四十余年にこれなし、八年（法華經が説かれた期間）の間にも但だ八品に限る」

「但だ八品の間に来還せり」

と仰せられ、日女御前御返事には

「抑此御本尊は在世五十年の中には八年、八年の間にも涌出品より属累品まで八品に顯給なり。」

（昭定 1374頁）

と、特別に本門八品が重要であることをお述べになっています。

この本門八品がなぜ大事なのかと申しますと、それはいま、あげた御妙判に示されているように、本門八品の間だけ、上行菩薩が現われているからであり、また、本門八品こそ滅後の衆生にとっての法華経となるからなのです。

また、本門八品に至ってはじめて、久遠本仏が菩薩としての因位（仏は果位）の修行をして、その結果得られたお悟りの全体（因行果徳の二法）が、その中に結晶のように包み込まれている御題目が顕わされるからです。そして、本門八品の御法門が説かれる間にだけ、南無妙法蓮華経の御題目を中心として十界の聖衆（下は地獄界から上は仏界に至るまでの十の世界の一切の衆生）が御題目に帰依して口唱礼拝している姿一時間と空間の限定を越えて過去久遠という時に帰っている姿が顕われます。永遠の今（E t e r n a l n o w）という表現がありますが、そういう真実の時間が実現されている瞬間、これをとらえたのが御祖師様の顕わされた御本尊そのものであるからなのです。御弘通のご祈願にせよ個人のご祈願にせよお看経をしている時、一心不乱になって時間がたつのも忘れていたという時、期せずして私たちは久遠本仏のみもとに参詣をしていたということになります。御本尊の前で一生懸命に口唱していた私たちが、知らず知らずに御本尊の世界に没入する、これを感応道交といい、その時、御利益を頂戴致します。これは決して、釈尊が靈鷲山において法華経を説かれたことは過去の話ではなく、消えてしまったものではない（靈山一会、巖然未散）その御法門を聴聞していた人々が知らない間に、過去久遠という時（本時）に帰ったように、私たちも御題目の口唱によってそういう状態になるのです。

先ほど、滅後の衆生のための法華経ということをお申しましたが、法華経には、実は二重の構造があり、釈尊が一方では目の前におられる直弟子の方々（在世の衆生）に説かれている面と、ご入滅後の人々、特にまだ生まれてこない末法の衆生に対して法を説かれている面とがあります。何のために法華経は説かれているかということ、一つには生々世々に修行を重ね、この度の生涯では菩提樹の下でお悟りを開かれた釈尊に

ついて修行をしてあらゆる教えを聴聞してきた在世の衆生を最終的に悟らせ成仏させるといふ面と、当時はまだ生まれていない仏の滅後の衆生のために、仏道の入門をさせるために信心を説いている面とがあるのです。言い換えれば学校で卒業式と入学式を同時に行い、生徒に一方で卒業証明書を与えている反面、入学者にガイダンスを行っているのです。

前者を在世の衆生のための法華経、在世の本門といい、後者を滅後の衆生のための法華経、滅後の本門というのです。ですから本門八品はこれだけで実は、一経としての体裁を持つもので法華経の中の法華経、本門の中の本門といえるので本中の本（本中之本）ともいいます。これに対して、在世の衆生を相手に法を説かれるときの中心（正宗）は涌出品の後半と寿量品全部、さらに分別功德品の前半（寿量一品二半という）で、この部分の御法門を聴聞して在世の衆生は成仏を遂げるのです。このような在世の衆生のための本門は、迹中之本といえます。

そこで、在世の衆生にとって大事なものは寿量一品二半、滅後の衆生にとって大切なものは本門八品の教えと、これによって顕される（本門八品所顕）南無妙法蓮華経なのです。

ところが、このような御題目を御祖師様がお唱えになって、御書に盛んに「本門八品」を強調されているにもかかわらず、日蓮門下といいながら単称日蓮宗（普通の日蓮宗）始め多くの宗派では本門と迹門は一致していて（本迹一致）、どちらが尊いとはいえないとして、天台宗と同じように「南無平等大慧、一乗の南無妙法蓮華経」と唱えているのです。これは御祖師様の教えとは全く食い違うもので、御利益は頂けないだけではなく、祖師敵対の謗法となるのです。

だいたい、御祖師様は天台宗が迹門法華経に立脚するのはやむを得ないことで、天台大師がそもそも像法の世に生まれられたために内心は本門法華経、特に本門八品と八品所顕の御題目が大切なことは分かっておられたけれども、これについてはわざと沈黙を守り（これを内鑿冷然という）、末法という時機が到来して上行菩薩が末法の

衆生に御題目を伝えられる時が将来、必ずあるということを考えられて末法の導師に譲られたのであるとされています。ですから末法にはいけば天台宗の使命はもはや終わったのであり、去年の暦のようなもの、今こそ、上行菩薩の生れかわりである御祖師様が本門八品を抛り所とする御題目をご弘通するのであると宣言をされております。それなのに、今さら、また、天台宗の説に回帰して「南無平等大慧一乗の南無妙法蓮華経」と唱えるのでは日蓮門下とはいえないでしょう。

でも、これは在世の本門と滅後の本門という法華経の二重構造が理解できていないためと、今一つは、祖師の直弟子のうち良かったのですが、それから少し経つと日蓮聖人の諸門流は中心地である京都の人々や仏教界からは関東の田舎の天台宗と見なされるようになり、また、自らも当時の一新興宗教のように見られるのを嫌い、どんどん正統の天台宗寄りになってきたのです。これは恐らく、服装でも教義でも行儀でも同様でしょう。こういう傾向は祖師のご入滅後、数えて一〇四年、至徳二年（西暦1385年）に門祖が誕生されて得度、出家され、長じて濁ってしまった日蓮聖人の門流を改革され清い流れに戻されるまで続いたのです。しかし、それでも改良できなかった流れが今もって続いていて謗法と知ってか、知らずか祖師の唱えられた御題目を唱えずに、教えに純粹ではなく筋違いの御題目を二、三回ほど唱え、専ら経文の読誦に明け暮れているのです。もし御祖師様をご覧になれば悲しい思いをされるに違いありません。

以上をまとめてみますと、この本門八品のテーマは「上行所伝の御題目を我も唱え人に勧める菩薩行」といえましょう。

この本門八品は、上行菩薩の生まれ変わりであり、久遠本仏の釈尊から直々に付嘱を受けた御祖師様でなければ分らなかった上行所伝の御題目、さらに難しい修行に耐えられない人々ばかりの末法にふさわしい、やさしい信心修行の仕方と、御題目ご弘通が即菩薩行という、現代の人々の全てが救われ、現当二世の御利益を頂くのに大事な根本が示されているのです。

佛立開導日扇聖人の御教歌に

八品は上行在座これなくば いかで末法下種を成ぜん (2 2 6 8)